



蜂須賀 茂昭



南 堅夫



稲田 邦植



尾方 長栄



大村 純安



新居 水竹



阿部 興人



小倉 富三郎 (Ogura Tomisaburo)

特別企画展

こうご 庚午事変の群像

■展示期間 平成19年1月23日(火)~4月22日(日)

■開館時間 午前9時30分~午後5時 ■展示場所 徳島県立文書館 展示室

〈展示解説〉文書館職員等による展示資料の解説 ■日時 平成19年2月18日(日)、3月25日(日) 午後1:30~3:30 ■場所 徳島県立文書館 講座室・展示室

庚午事変の群像

庚午事変の構図

●背景

明治初年、「王政復古」の号令のもと、「御一新」(明治維新)は進行し、政府は旧体制の打破と新しい中央集権国家の建設を進めていった。明治2年「版籍奉還」が行われ、旧藩主は知藩事、藩士は士族・卒族となり、禄制改革によって、家禄は石高の10分の1となった。稲田家臣の多くは卒族に編成されることに決まり、不満は高まって行った。維新期の活躍を背景に強力な嘆願運動を続けていくことになる。そのことに疑念を強めていた徳島藩士達の憤慨は高まっていく。

明治2年6月 版籍奉還

明治政府

三条実美
岩倉具視
岩倉家家扶
海部関六
大久保利通
木戸孝允

小室信夫
(岩鼻県権大参事)
(元蜂須賀家家臣)

立木兼善
(福島県権大参事)
(元稲田家家臣)

徳島藩徴士
中島錫胤
林厚徳

徳島藩

徳島藩知事
蜂須賀茂韶 (23才)

藩重役
尾井星日寺 関上比野沢 成高常克甚 章格恕巳内

明治3年3月 政府の調停(北海道移住案)

主謀者(扇動者)として切腹

総司総学頭
新居水竹(精神的イデオログ)
学館管事
小倉富三郎(除姦之説大意)
大村純安(学校書生 洲本)……脱歸者
平瀬伊右衛門(牧民従事 洲本)…脱歸者
多田禎吾(牧民検事 洲本)……脱歸者
南堅夫(応接役)……脱歸者
三木寿三郎(兵士)……脱歸者
小川錦司(兵士)……脱歸者
瀧直太郎(学校書生)……脱歸者
藤岡次郎太夫(兵士)……脱歸者

攻撃隊の司令として終身流刑

上田基五右衛門 (洲本大隊司令)
平瀬 所兵衛 (洲本台場司令)
穂積 問兵衛 (洲本農兵司令)
織田 角右衛門 (洲本台場司令)
小川 金次郎 (洲本農兵司令)

その他の主な処罰者

海部関六(岩倉家家扶)……終身流刑
海部六郎(岩倉家家臣)……7年流刑
小野又兵衛(銃士隊司令)……終身禁錮
山田 貢(銃士隊司令)……終身禁錮
阿部興人(文学助訓読)……終身禁錮
柴六郎[秋邨](文学教授)……禁錮3年

明治3年 8月……判決発表
9月 3日…8士徳島にて切腹
9月15日…新居・小倉・芝白金
徳島藩邸で切腹。

(庚午事変への動き)

明治2年6月 茂韶の藩政改革

明治2年8月 稲田家臣の不満と嘆願

明治3年4月 分藩独立の要求

明治3年4月 藩士の憤激(除姦論)

明治3年5月6日 八士の脱歸

明治3年5月13日 襲撃

稲田家(徳島藩旧筆頭家老)

当主
稲田邦植 (16才)

稲田家重役

三田昂馬 洲本
七条弥三右衛門 洲本
内藤 弥兵衛 洲本
尾方 長栄 猪尻
南 薫風 猪尻
工藤 剛太郎 猪尻

家臣団の団結から 分藩独立の運動へ

1 勤王の功績の主張
2 稲田家主従関係の存続と士族
編入
3 禄制改革への経済的不満
4 被差別意識(陪臣)の克服

稲田家臣 無抵抗

〈洲本〉自殺2・即死15
重傷6・軽傷15
焼失家屋多数
〈脇町〉高松藩へ避難343
〈大阪〉稲田屋敷より避難

明治3年10月15日 稲田家に北海道移住が下命される。

明治4年 2月 北海道移住第一陣550人余。
5月15日 稲田邦植に、維新の功績として従5位が贈られる。

8月25日 北海道移住第二陣を乗せた平運丸遭難。溺死83。

明治4年8月29日 廃藩置県

ごあいさつ

庚午事変再考

日本の近代が幕開けた明治三（一八七〇）年五月、のちに「庚午事変」（稲田騒動）といわれる大事件が徳島で起きました。江戸時代、徳島藩領であった淡路に大きな勢力をもつ家老稲田家の分藩独立の動きに対して本藩の侍たちが稲田家臣宅を襲撃し、多数の犠牲者を出したのです。

この騒動を重視した維新政府は、騒擾の首謀者を斬罪や流刑などの嚴罰に処し、稲田家を北海道へ移住させるとともに、淡路を徳島藩から分離させるなど、その後の徳島の近代の歩みに大きな影響を与えました。

この事件は、繁栄を誇った近世の徳島藩が、新しい時代の飛躍を図ろうとした矢先の事件であっただけに、出鼻をくじかれ、多くの有能な人材を失ったこともあってその後の低迷の一因とされてきました。

また、この事件は、これまで多くの研究者の究明により、明治維新という近代天皇制国家建設の過程で起きた悲劇的なお家騒動、大義名分論に基づく武士の忠君愛国精神の発露などとしてとらえられ顕彰されたりしてきました。

近年では、この事件をモデルにした船山馨の小説「お登勢」がベストセラーとなり、映画「北の零年」をはじめ多くのドラマの素材として、激動の明治維新を象徴する史実としてしばしば取りあげられています。

文書館では本県に関する歴史資料の収集・整理・保存を進めています。調査・研究が進む中で、庚午事変についても新しい史実の発見や解明が生まれつつあります。

平成十二年度に開催した「徳島県人の北海道移住展」では、庚午事変による稲田家の静内移住が徳島県人の北海道移住の隆盛をまねいたこと

や、北海道立図書館には事件の中心人物のひとり、のちに県会・国会議員として徳島や北海道・中央政界で活躍する阿部興人の日記や文書が残されており、日記の解説もはじまりました。

また、徳島文理大学に所蔵されている『新居水竹関係文書』には、庚午事変の首謀者とされた水竹の日記や書簡など徳島の幕末維新期を解明する貴重な史料があることや、国立公文書館所蔵の『太政類典』『公文録』などが現在、「デジタルアーカイブ」として目録公開され、庚午事変に関しても「明治三年徳島騒擾始末」として存在していることなど、新史料の発見は徳島の近代史研究に新しい局面が生まれたと言えます。

徳島県立文書館では、これらの史料を再整理し、検討会を重ねながらこの徳島の重大事件を、日本史的な観点にたって、その史実を見直して来ましたが、今回の展示では明らかにしつつある成果の一端を紹介いたします。

この企画展が問題提起となって新たな論議を巻き起こし、徳島の近代史のみならず、新しい成果の生まれはじめた明治維新史研究を明らかにするためのひとつの契機となることができたいと思います。

最後になりましたがこの展示にあたり、貴重な資料を提供いただいた国立公文書館、北海道立図書館、東京都公文書館、徳島文理大学、洲本市立淡路文化史料館をはじめ、小倉シズ子、松本博氏、村井道明氏など多くの方々の御協力をいただきました。末尾ながら心からお礼申し上げます。

平成十九年一月二十三日

徳島県立文書館長 立石 恵 嗣

庚午事変の群像

日記に見る脱藩者の行動

明治3年日付	大村純安の行動 「幽囚中略記」より	阿部興人の行動 「阿部興人日記」より
5月6日	大村純安・平瀬伊右衛門・多田植吾・南堅夫・海部六郎(実名玖珂周治、防州岩国藩士)・瀧直太郎・三木寿三郎・小川錦司・藤岡次郎太夫の9人、東京一橋邸を出発し、新橋に着き馬車2台を借りて南に向かう。午刻(午前12時)に神奈川駅に着き、早馬・竹馬龍・壮丁23名を命じて西へ向かう。申下刻(午後5時)小田原に着き、壮丁40余名を命じる。(暴風大雨)。戌刻(午後7時)箱根山に至る。箱根駅にて泊る。	午後、海部六郎に八土脱藩の様子を聞き、帰藩を勧められる。
5月7日	朝早く立ち、辰上刻(午前7時半)三島駅に着く。(瀧直太郎気絶。藤岡治郎太夫が扶持)その後夜を問わず走る。	朝「義父病氣につき帰省願」の提出を益田武衛に頼む。新居水竹に30両を借り、軍服・革靴を購入。
5月8日	申刻(午後4時)吉田駅に着く。夜三更(午後10時)乗船し四日市に向かう。(暴風が起り遠州灘を漂流する。)	さらに15両を借り、8つ過ぎ(午後2時)一橋藩邸を出る。岩倉邸の海部に対面。海部、別れの宴を催し、脇差を取り替える。早駕籠で出発し、12時過ぎ(午後12時)横浜三浦屋に着く。同行者8名
5月9日	朝伊勢神宮そばの港に漂着。上陸して農夫30人を雇い、駕籠を走らせ松坂・関を通り、鈴鹿峠を越える。	二ウーヨロハ艦(米船)に乗船。(運賃洋銀10枚)4時(午後4時)横浜出航。
5月10日	午前中、伏見に着く。30石船を雇い二更(午後10時)大阪に至り、船を二隻雇い、大村純安・平瀬伊右衛門・多田植吾の3名淡路へ、南堅夫・海部六郎・三木寿三郎・小川錦司の4名は徳島へ向かう。	夕6時(午後6時)紀州大島の間を通り過ぎる。(三田島馬の徒南某に合う。)
5月11日	辰刻(朝8時)大村等の船淡路へ着く。	夜3時(午前3時)神戸着。11時(午前11時)洲本行き早船(借賃3両2分)に乗る。岩屋浜に着き宿泊する。伝馬頼いを提出。
5月12日	(記述無し)	午前3時起床。運夫・伝馬が来る。納村伝馬所で加集平左衛門に会い、洲本攻撃の手配。明日7つ(午前4時)出兵の手筈などを聞く。6つ過ぎ(午後6時)岡崎着。早船で徳島に向かう(借賃130日)。
5月13日	洲本攻撃を実行。	夜8つ前(午前2時)福島探練所に上陸。諸隊は福島探練所に勢揃いしており、小野隊長に会う。

へ行っている。当時山口では、新政府の常備軍に選ばれなかった農民が主力である奇兵隊・遊撃隊などの諸隊の兵士約一千名が萩藩庁となった山口を包囲するという事態となっていた。藩知事の鎮撫にも従わなかったため、元は諸隊を統率していた木戸孝允が萩藩や支藩の常備軍を率い鎮圧をし、首謀者百三十三名を処刑

するといふ事件となった。こうした事件を間近に見ていた南・阿部らは、藩に抵抗する奇兵隊の首謀者達を稲田家家臣の人々に置き換えていたのではないだろうか。

この視察が終わったのち、南堅夫は一且徳島に帰藩する。阿部興人と益田武衛は三月十日に東京へ戻ってきている。

IV 十七上京

三月二十日、元蜂須賀家家臣岩鼻県知事小室信夫、元稲田家家臣福島県知事立木兼善(林徹之丞)の二名が岩倉大納言より内旨を稲田方・徳島方両方に伝えるため徳島へ到着し翌日南浜の藩庁へ入った。その内旨は、稲田家に北海道静内郡・色丹島の開拓を命じるものであり、徳

島藩はその開拓費として十年間一万三千五百石の給付を命じられた。三月二十七日に稲田家家臣は北海道移住開拓の承知を伝え、その代わり徳島藩からの分藩独立を認めるようお願いしている。このことに対し徳島藩は、稲田家に勤王の功勞により特別の恩賞を政府に求めることで分藩と北海道移住を止めようとし、四月四日に政府への嘆願文を作成した。このよ

うに藩庁の意見は決定したが、藩内にも不穏な動きがあるためこれまでの成り行きを明白にして藩士の疑念を晴らすため、これまでの稲田家家臣の嘆願と徳島藩の対応について藩士一同を呼び出し書類を公開した。公開文書を見た藩士達は、藩知事茂留の前で次々に意見を述べ始めた。その多くは、分藩などはもつてのほ

かであり稲田家家臣の武力処分も辞さないというものであった。話し合いは続きようやく六日未明となつて総代十人を東京の新政府に派遣し嘆願をすることが決まった。その十名は新居水竹・小倉富三郎の二名藩士総代監督とし、阿波方は瀧直太郎(子弟寮長)、南堅夫(銃士・応接係)、小川錦司(銃士・学校一等等生)、藤岡次郎(銃士・学校二等等生)、三木寿三郎(銃士)、兼松又三郎(銃士)の六名。淡路方は大村純安(学校一等等生、都講)、平瀬伊右衛門(淡路牧民従事)、多田植吾水利奉行)、角村十右衛門(総政局検事)の四名計十二名となった。

さらに、小室信夫・立木兼善の両使者、星合常徳・尾関成章両徳島島権大参事も上京することになった。

四月二十日十二名は東京一橋の蜂須賀邸に入り、外交方阿部興人・益田武衛等に東京の様子を聞いている。翌二十一日には嘆願書を政府に提出し、二十三日には小室・立木の両知事より政府に対し徳島藩の様子について復命が行われた。これに対し政府は総代十二名に何らかの申し渡しがあるまで藩邸で留め置くよう申し渡したのである。

V 八土脱藩(脱走帰藩)

四月二十七日ようやく出た政府からの決定は、藩知事茂留に対して稲田九郎兵衛を同道して上京せよというものであった。翌日、十士の内、阿波方兼松又三郎、淡路方角村十右衛門が茂留・九郎兵衛への使者として東京を立ち帰藩している。

鹿島秀磨著「竹窓遺稿」(大村純安遺稿集)表紙



阿部興人日記表紙(北海道立図書館所蔵阿部家文書)



は続きようやく六日未明となつて総代十人を東京の新政府に派遣し嘆願をすることが決まった。その十名は新居水竹・小倉富三郎の二名藩士総代監督とし、阿波方は瀧直太郎(子弟寮長)、南堅夫(銃士・応接係)、小川錦司(銃士・学校一等等生)、藤岡次郎(銃士・学校二等等生)、三木寿三郎(銃士)、兼松又三郎(銃士)の六名。淡路方は大村純安(学校一等等生、都講)、平瀬伊右衛門(淡路牧民従事)、多田植吾水利奉行)、角村十右衛門(総政局検事)の四名計十二名となった。

具体的な様子が良くわかる。

庚午事変の暴発に至るまで

I 版籍奉還と藩政改革

明治維新を迎えたといっても、大名の領地である藩では土地も領民もまだ藩主のものであった。木戸孝允・大久保利通・後藤象二郎らは、新政府の中央集権化を図るため、各藩から、版（藩の封土）籍（藩領民の戸籍）を新政府（天皇）へ奉還させる構想で協議を進めていた。明治二（一八六九）年正月二十日長州・薩摩・土佐・肥前の各藩主は連署して版籍奉還の建白書を政府に提出した。戊辰戦争時の戦費調達や諸物価の高騰で藩経営が困難に陥っていた所が多かった諸藩は、こぞって四藩にない版籍奉還の建白書を提出していった。

政府は、六月十七日から二十五日にかけて各藩版籍奉還の建白に対して許可を出している。徳島藩も『公文録』六月二十四日付けで、版籍奉還の許可が記載されており、同時に蜂須賀中納言茂韶の徳島藩知事就任が宣下されている。

翌二十五日、新政府はこれを受けて各藩に庶務変革を傳達し、支配地の総高や職員等について十月中に調査を行い報告書を提出することを命じた。この改革により、まず藩知事の家禄は十分の一と定められ、藩政と知事家政が明確に分けられた。藩士は一門より平士まで全ての武士内部の身分格式を解消して士族とし、それ以外の中間・足軽などは卒族とされた。徳島藩知事茂韶は、その日の内に津

和野藩主亀井茲監・岡山藩主池田慶徳とともに新政府に質問状を提出し、士族の給禄支給に対して各藩の自主性に任せる旨の回答を引き出している。士・卒族を分ける基準の多くは自主性に任せられ藩により格差があった。明治政府は明治八（一八七五）年にはこうした格差を解消するため、卒を廃止し全て一代限りの士族としている。

II 稲田家臣の嘆願

蜂須賀茂韶は版籍奉還を受けて、明治二年六月中に藩制改革に手を付け、七月二十六日には帰藩して強く改革の意志を伝えている（さらに十二月十八日には徳島城を明治政府の公解（役所）に指し出し、南浜御殿（現在の新蔵町付近）に藩庁を移している）。藩士はこれまでの家格・家禄を全て返上させ、士族として九等に分けた。家老の家は一等級となり一律千石の現米支給、家臣団は解散となり、旧家来の内高禄のものは百石に付き三人扶持を与えることとし、その他の家臣は藩の銃卒とし藩から直接米が支給されることになった。この決定に対し、稲田家家臣達は八月十日に徳島藩諸家中の中で別格の扱いをしてもらえるよう嘆願し、さらに九月二十四日には稲田九郎兵衛名での藩へこれまでの主従関係を維持したい旨の嘆願書を提出している。その後、稲田家家臣達は、家臣団を二つに割る

ことになる改革に対して反対の意思を示し続けるようになり、政府による制度改革の意味や過去の稲田家の功績をめぐって稲田家の嘆願と徳島藩による説諭の応酬になっていく。徳島藩は十一月十三日、権大参事井上兵馬（高格）を東京に派遣し、稲田家家来の士族編入について新政府に嘆願し知事一任を取り付けるなど譲歩の道を探った。しかし、十二月より翌年二月にかけて、稲田家家臣は家臣解散と士族編入の二点を譲ることなく、戊辰戦争時のつてを頼り、岩倉具視や有栖川宮に直接嘆願などの運動を始めたのである。

III 徳島藩外交方の活躍

稲田家家臣の動きに徳島藩側もただ黙っているわけではなかった。明治二年十月、徳島藩は、藩校長久館の俊英である南堅夫（新居水竹に伴われ東京にいた）、阿部興人・益田武衛（永武）の三人を外交方に任命した。阿部と益田は十一月中旬に東京に到着し、一橋徳島藩邸（元一橋徳川家藩邸、明治元年に徳島藩邸として蜂須賀家に与えられていた）を根拠地に活動を開始した。当時徳島藩からは、徴士として中島錫胤が太政官中弁、大津伊之助（好郷）は集議院権判事、林厚徳（新居水竹の妻の兄）が民部大丞少弁になるなど政府の一員として東京にあり、徳島藩の新政府への窓口として機能していた。また、岩倉具視の諸太夫（家老級の家来）として、阿波国海部郡出身という海部閑六がいた。こうした人物を通じ

て新政府に対する働きかけを強めていった。

明治三（一八七〇）年二月十八日外交方の三人は、長州藩での藩政改革に関する内乱騒擾の風聞を聞き、明治政府から宣撫使に任せられた大納言徳大寺実則一行について蒸気船戊辰艦に乗り込み山口



大村 純安



阿部 興人



益田 武衛（永武）



南 堅夫

新居水竹の書簡に見る庚午事変



新居水竹肖像写真（個人蔵）

れている。九月十五日に芝白金の徳島藩邸で小倉富三郎と共に切腹が行われ、介錯人は原謹吾、介添人は益田武衛（永武）という弟子達であった。遺骸は三田の明王院に送られ埋葬され、遺髪は徳島に送られ潮見寺に葬られた。

この期間に水竹が家族に当てて送った書簡が、徳島文理大学所蔵、新居水竹関係文書の中に残されているので少し紹介してみたい。

新居水竹は、徳島藩の儒者であり、庚午事変当時長久館の総学司学頭（現在の大学総長のような地位）の地位にあった。徳島藩における学問上の精神的支柱であり、学友・弟子などの人脈は、徳島藩の枠を越えて幅広いものであった。

庚午事変での水竹の役割を見てみよう。四月七日に東京へ嘆願に行った際にはその嘆願文を起草し、小倉富三郎と共に嘆願者の代表十士の監督者として東京に向かっている。東京に着いてからは、一橋の徳島藩邸を根拠に政府への嘆願文提出を中心になって行いが、藩主蜂須賀茂韶と稲田九郎兵衛の召還という事態を招いてしまい、五月六日の焦った脱走婦藩者八名を送り出してしまふ。脱婦者を出したことを九日報告書にして出した後、十日には藩邸で謹慎、十五日には禁錮を言い渡された。その後東京の一橋藩邸で禁錮の生活を送り尋問などを受けるが、八月に入って斬罪の処分が言い渡さ

史料番号	日付	差出	宛先
ニイ200595	4月10日	水竹(成園)	→ 敦次郎・棟三郎
ニイ200592	4月21日	水竹(与一助)	→ 敦次郎
ニイ200585	4月28日	水竹(受益)	→ おたか・敦次郎(敦二郎)
ニイ200591	5月7日	水竹(成園謙)	→ 敦次郎(敦二郎)
ニイ200590	5月8日	水竹(成園)	→ 敦次郎(敦二郎)
ニイ200559	5月10日	水竹(記載無し)	→ 敦次郎(記載無し)
ニイ200606	5月14日	水竹(受益)	→ (記載無し)
ニイ200589	5月15日	水竹(与一助・受益)	→ 敦次郎(敦二郎)
ニイ200588	5月16日	水竹(与一助)	→ お高・敦次郎(敦二郎)
ニイ200587	8月朔日	水竹(しげます)	→ おたか・敦次郎(敦二郎)

●四月二十八日の書簡

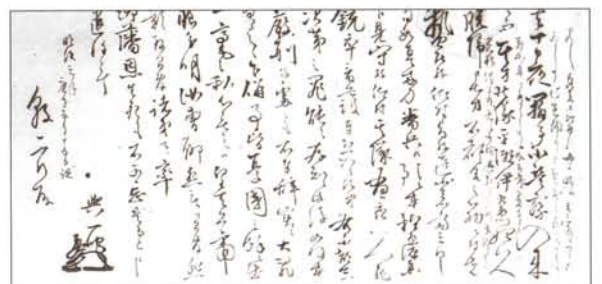
知事蜂須賀茂韶と稲田九郎兵衛の召し出しと、藩士の沸騰を取り鎮めるため三間才兵衛監察と十士の内の二十兼松又三郎と角村十右衛門が帰藩したことを伝えている。民部大丞小弁である林厚徳の家を訪ね、歓待を受けたことを書き、敦次郎ら家族に東京の状況について心配をかけまいとしている内容である。

●五月七日の書簡

大村純安・平瀬伊右衛門ら八士が脱歸したのち書いた書簡。脱歸について直接記してはいないが、「今般の国難は、未曾有のことだから、未曾有の処置をしなければならず、勿論藩士は未曾有の決心をしなくては人に顔向けができない。」と記し、その決心の深さを示している。さらに「いづれも結局の所はこと過ぎて後、吾が心事などは六太夫（日比野克巳）又は秋邨（柴秋邨）に聞けばわかる。」と書き未曾有の事件が起こることを暗示した内容になっている。また、心配であったのか妻のお産についても記している。

●五月十五日の書簡

端裏書に敦次郎に宛てて母には見せないように記しているこの書簡は、水竹が平瀬伊右衛門始め八人脱婦の件で、政府から蟄居を告げられたことを知らせている。「八人を監督するべきものが脱婦をさせたことは大罪であることはわかっているが、これは憂国から出た行動で、私心はないことは明白である。



5月15日 新居水竹書簡（新居敦次郎宛）
（徳島文理大学付属図書館所蔵新居水竹関係文書）

みな恨みごとを言つて嘆き悲しむようなことがないように、敦次郎は兄弟を率いて藩の恩を忘れないように。」と書き送っている。産後すぐの妻を気遣つてのことかもしれない。

●五月十六日の書簡

前日の手紙とは違い、知事蜂須賀茂韶が東京に到着したことから書き始め妻が読むことを前提に柔らかな内容で書かれている。知事の従者が持参した手紙により妻が女子を産んだこと。お産が安産で、産後の肥立ちも良いことを知り飲んでい。一方脱婦者が徳島へ帰り着き大騒動になっていることを予見し、心配している旨を伝えている。実際には徳島・洲本で十四日に暴発が起った後で書かれたものであるが、家族が無事であつて欲しい心情を見ることが出来る。

小倉富三郎と「除姦ノ説大意」



小倉富三郎肖像画（個人蔵）

庚午事変では八士脱歸の監督責任を問われ、明治三年九月十五日に東京白金の藩邸で切腹し、六十二歳でその生涯を閉じた。東京三田の明王院に埋葬された。墓所は徳島市佐古三番町の清水寺である。戒名は豊光院教仙道阿居士。

● 辞世の句の意味解釈

屠腹の日とも畏き君が仰せ事
 拜承奉りて 忠古

今は早捨つる命の惜しからで君が情に濡るる袖かな

「意味」斬罪であった罪を名誉ある切腹にお救いいただき屠腹の日に大変畏れ多い君主様からの仰せられた事を拝承いたしました 忠古

今はもう捨ててしまおうとしている命は惜しいことはなく、君主様の情有り難さに涙で濡れる袖であることよ。

本末も今は言はじな梓弓引き返すべき事にあらねば 忠古

「意味」事（庚午事変）のいきさつも今はもう言うまいな。神聖な梓弓がそうであるように、一度引いてしまったものは前に進むしかないのだから。

我が君の為に出し甲斐なくて何甲斐やある命ならむ

勇み立つ駒の足並み如何なれば止め

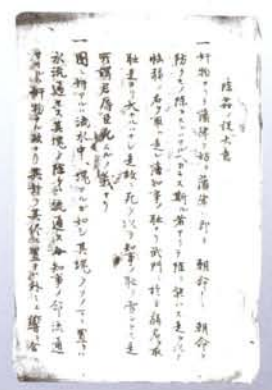
得ずとや人の言ふらむ
 「意味」我が君主様の為に出藩したけれども、その甲斐もなく一体何の甲斐がある命だろうか。

勇み立つ駒の足並み（決起した若者たち）をどうして留めることが出来なかったのかと今頃人は言っているだろうか。

軸は元々は一枚もの。紛失すること恐れ子孫が表装した。辞世の句には、斬首の判決が下された首謀者たちの恩赦の為に藩主が奔走したことに對する感謝、そして、藩主に仕える藩士としての誇りと忠誠を尽くしたことに後悔はない気持ちを持ちながらも、その反面、これから先のある若者たちを守れなかったことに対しての無念も込められているようである。



小倉富三郎辞世の句（個人蔵）



除姦ノ説大意（徳島文理大学付属図書館蔵 新居水竹関係文書）

水竹関係文書に含まれている。修正の跡が見受けられることから、一度書いたものを手直ししたようである。この除姦ノ説大意は、上京していた平瀬・大村ら八人の若い藩士たちが脱歸したことを庇護する目的で書かれた陳情書である。文章は平易で、九箇条から成る。「流水（知事の命）の中に塊（奸物）があれば、水は滞ってしまい（知事の命は通らない）」といった比喻を多用して書かれており、富三郎の主張が理解しやすい。藩知事のためには藩内が一時動揺しても、長い年月を考えれば奸物を取り除かなければならず、そのために八士が脱歸したのであり、決して私憤によるものではない、という八士の意を推し量って述べられている。「奸物があれば、除かねばならない。脱歸は藩知事のためであって、決して憤懣などの私的感情によるものではない」と繰り返して述べられることから、君主への強い忠誠心と若い八人の志士を守らなければならないという年長者としての強い義務感を読みとることができ

（西村美保）

●「除姦ノ説大意」
 徳島文理大学付属図書館蔵の新居

●人物略説
 名は忠古。生年は不詳。実父は渡辺嶋之助勝長、実母は高橋十郎右衛門道正女。富三郎は渡辺嶋之助の二男であったが、天保六（一八三五）年、小倉弥一右衛門忠胤の養子となり、家督を相続した。小倉家の祖にあたる小倉備中守は三好家直属の旗本で、三好元長に従い京都から阿波へきたのち、一宮長門守成助の妹婿となった。しかし、長曾我部氏との合戦で嫡男の新正が討死し、一族は名西郡阿川村・勝浦郡福原村を経て、西名東僧都に居住していた。その後、蜂須賀家に仕官し槍術師範の家であった。

富三郎は佐古に居住し、役職は御墓山番を努めていた。槍術（正田流）師範として名高く、多くの門人を抱えていた。明治二年の新緑制により四等学館管事に任命されている。学館管事は文武七科を持つ総合学校であった藩校長久館の幹部であり、新居水竹と直接の親交もあった。

庚午事変の群像



「公文録・徳島騒擾始末」より「須本暴動始末取調伺書」(部分) 明治3年7月に徳島藩が提出した断罪案。脱婦者に対しては梟首(さらし首)など、重い刑罰が提案されている。

習館など二十軒以上の家屋が焼失している。ただ、稲田邦植の家族は難を逃れ、邦植の実母は実家である水口藩(滋賀県)に身を寄せている。また、徳島藩兵たちが分藩運動の中心と見なしていた三田昇(昂)馬ら稲田家の重臣たちも難をのがれている。

●大阪の騒動

騒動は大阪にも波及した。当時大阪の兵学寮に留学していた小野進・蜂須賀彦六ら徳島藩士三十人のもとには、徳島で騒動が起こったという情報が十四日に届けられた。蔵屋敷詰公用人の制止を押し切った彼らは徳島に向かうが、途中で稲田の大阪蔵屋敷を襲撃することに方針転換。同所に押し寄せたが、ここでも稲田家家臣は逃亡に成功していた。

●処断

事件後、首謀者と見なされた南・大村ら脱婦者はそれぞれ藩士へお預け、各司令は謹慎となった。五月二十一日に事件の一報を受けた蜂須賀彦六は二十七日に東京を出発して帰藩の途にいた。事件を重視した政府は弾正少弼黒田清綱らを徳島に派遣し関係者の取調に当たらせる。八月、新居水竹ら十

名に斬刑(特に切腹をゆるさるる)、海部閑六・上田甚五右衛門ら二十六名に終身流刑、阿部興人・小野又兵衛・山田貢ら八名には終身禁固などの判決が出される。また、寺沢甚内が禁固二年半に処せられるなど、洲本の暴動を阻止できなかった一部の藩首脳陣も処断されている。一方、暴発を止めるために切腹した下条勘兵衛と牛田九郎に対しては、太政官から祭祀料としてそれぞれ二百両が下賜されている。蜂須賀彦六に対しても、本人の願を受ける形で一ヶ月の謹慎が十月に申し渡されている。

九月三日に大村・原ら八人の脱婦者の切腹が徳島城下助任の万福寺と住吉の蓮花寺で、九月十五日に東京白金藩邸で新居水竹と小倉富三郎の切腹が行われた。流刑となった者は九月十一日に徳島を出発して東京に護送され、十月に八丈島・新島に送られている。終身流刑者・終身禁固者は明治六年の新律綱領発布にもなつて減刑され、家に帰ることをゆるさされている。

一方、稲田側は当初の政府の調停案のように北海道移住が決定した。明治四年にはじまった開拓は、開拓地での火災や船の遭難など当初から苦難の連続であった。

こうして庚午事変は徳島本藩側・稲田側双方に大きな犠牲を強いる結果となり、その後の徳島の歩みに大きな影響を残すことになった。

稲田側の被害一覧(「公文録」より作成)

人的被害			
淺手	深手	即死	自殺
篠原 伝	田村 政太郎	藤木儀三郎	三宅達太郎
宗田 覚蔵	真鍋領右衛門	宗田 覚蔵 娘	藤井 一郎
田村 量平	堀 藤右衛門	甲藤 敬太郎	
藤本 宜仙	安友(安藤)半平	斎藤 寅太郎	
矢上富次郎	佐野 樞太	浅田 藤太夫	
稲田三郎兵衛	谷 美津蔵	井上省右衛門 妻	
藤井 一郎 娘		篠原 幸助	
三宅哲治郎 妻		中野 繁	
丹羽猪右衛門 妻		嶋本 保	
三宅達太郎 妻		坂井晋之助	
谷山萬兵衛 妻		藤岡恭作(泰助)	
清七		丹羽猪右衛門	
角蔵		津田直之進	
常吉 妻		仁木儀左衛門	
津田殿中 下女		徳蔵	
計 15人	計 6人	計 15人	計 2人

焼失した建物

稲田九郎兵衛	宇山邸
	宇山邸長屋
益習館(稲田家学問所)	
三田昇(昂)馬	居宅
七條弥左衛門	居宅
佐和礼	居宅
押村幸之助	居宅
野原弥三兵衛	居宅
津田殿中	居宅
青山晋	居宅
浅野嘉太郎	居宅
沼田実	居宅
林直右衛門	門長屋
矢上美吉	長屋
	他 長屋7棟
	他 長屋3力所

庚午事変における主な処罰者(「公文録」より作成)

氏名(役職)	罪 状	刑	備考
新居与一助(文学頭)	南ら10名の脱藩(脱走帰藩)を黙認。監督不行届。	斬刑(特に切腹をゆるさるる)	
小倉富三郎(学館管事)		同上	
南聖夫(応接役)	兵隊総代として東上出願中に脱藩。徳島において諸隊を扇動し藩内を騒擾させる。	同上	
小川錦司(兵士)		同上	
三木寿三郎(兵士)		同上	
平瀬伊右衛門(牧民従事)	兵隊総代として東上出願中に脱藩。洲本において諸隊を扇動し藩内を騒擾させる。	同上	
多田禎吾(牧民検事)		同上	
大村純安(学校書生)		同上	
瀧直太郎(学校書生)	兵隊総代として東上出願中に脱藩。途上において発病し遅れるも、諸隊を扇動し藩内を騒擾させる。	同上	
藤岡次郎太夫(兵士)	兵隊総代として東上出願中に脱藩。瀧の看病のため遅れるも、諸隊を扇動し藩内を騒擾させる。	同上	
海部六郎	脱藩者と同道し藩内を騒擾させる。	流刑七年(新島)	海部閑六養子 本名玖珂周二
海部閑六	兵隊総代の者を扇動して脱藩にいたらしめ、名代として養子の海部六郎を同行させる。	流刑終身(新島)	岩倉家家臣
野尻節助(洲本牧民従事)	牧民職にもかかわらず脱藩者に同調し、兵隊を扇動し、檄文を伝え、藩内を騒擾させる。	流刑終身(新島)	
今田増之助(洲本牧民従事)	同上	流刑終身(八丈島)	大島波浮港で病死
上田甚五右衛門(洲本銃卒大隊司令)他4名	兵隊司令でありながら脱藩者に同意し、洲本で武力行動を起こす。	同上(八丈島)	明治6年に赦免
織田角右衛門(洲本台場司令)他3名	同上	同上(八丈島)	大島波浮港で病死
森戸錫太郎(洲本銃士分隊司令)他8名	同上	同上(新島)	入牢中に病死
七條東(洲本農民司令)他4名	同上	同上	
阿部興人(文学助問読)	脱藩者と申し合わせて、老父の看病のためと偽って帰藩。藩内を騒擾させる	禁固終身	
小野又兵衛(銃士隊司令)	兵隊司令でありながら脱藩者に同意し、藩内を騒擾させる。	禁固終身	
山田貢(銃士隊司令)他2名		禁固三年	
小野進(銃卒大隊司令・大阪修行生)他18名	大阪兵学寮入塾中でありながら帰藩を乞い、大阪稲田屋敷に押し寄せ、近隣を騒がせた。	謹慎	
青木克雄(大阪兵学寮修行生)他8名	同上	謹慎	
柴六郎(文学教授)	文学教授でありながら脱藩者に同意し、檄文を認める。	禁固三年	
寺沢甚内(大参事)他四名	衆力に押され洲本の暴発阻止に失敗。職掌柄不行き届き。	禁固二年半	
洲本銃士隊一同	暴挙の始末不詳	謹慎	

暴発 徳島・洲本・大阪の動き

●未遂に終わった猪尻攻撃

徳島に帰り着いた南堅夫・三木寿三郎・小川錦司・海部六郎が東京の情報を伝えて決起を促した五月十二日、事態は急展開を見せはじめる。分藩運動を展開してきた稲田家の旧臣を非難し、武力を以てこれを「誅罰」「斬戮」する旨の檄文が兵隊中の名前で作成され、各所に張り出される。同日の夕方になると徳島城下の福島練所に藩兵隊が集結し、翌朝阿波国内における稲田家の拠点である猪尻（美馬市脇町）へ向けて出撃する手はずが整えられた。この五月十二日に、徳島藩知事蜂須賀茂韶は稲田家当主の邦植をとらえて東京に向けて出発している。茂韶不在中の蹶起には、彼に責任を及ぼすまいとする徳島藩兵の思惑が込められていたとされる。

藩兵隊の動きを察知した井上高格ら藩首脳陣は暴発を思いとどまるよう必死の説得を続けたが、銃士二番隊司令小野又兵衛・同四番隊司令山田貢ら藩兵隊の司令たちはなかなか納得しなかった。この説得工作は場所を藩庁に移して翌日も続けられ、夕方になってやっと藩兵隊は猪尻攻撃を断念する。

藩首脳と司令たちの交渉を鷲の門前で待っていた藩兵隊のうち、午前中に四番隊第三小隊が十三日の午前中に進軍を開始する。この一行には、南ら東京からの脱帰者やこの日の早朝に淡路を経由して

到着した阿部興人らも順次合流する。

彼らは佐古で蜂須賀一門の久之丞を擁した蜂須賀協に阻止されるが、一端解散するふりをして、別の道を通って鮎喰河原へ到達。急遽藩庁から派遣された小野・山田両司令は軽拳を戒めたが、この説得工作も失敗し、山田司令は逆に藩兵に説き伏せられてしまった。同日の八時半（午後三時）頃に一行は名西郡下浦（石井町）まで到達。ここで藩庁から派遣された下條勤兵衛と牛田九郎が追いつき、第三小隊を止めるために切腹している。この日一行は下浦で一泊することになる。一方、猪尻の稲田側では無抵抗を決め、三百人を越える士卒が阿讃山脈を越えて高松藩

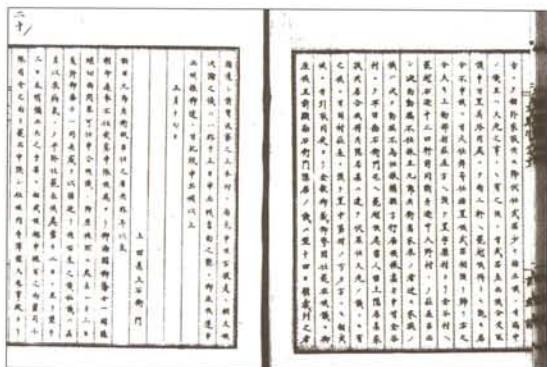
領に避難を開始している。

十四日、早朝から小野又兵衛や脱帰者の親族らによる説得工作が続けられた。そこへ井上高格・蜂須賀協らに加えて前夜半に東京から急遽帰着したばかりの星合常恕が訪れ、「暴発すれば蜂須賀家は取り潰す」旨の政府の意志が伝えられる。ここに及んで第三小隊も猪尻攻撃を断念し、前夜から降り続く大雨の中を午前十時頃から撤退を開始する。その中には、小野・山田に切腹を止められた南らの姿もあった。こうして徳島側の暴発は未遂に終わり、犠牲も最小限に抑えることができた。

●洲本の暴発

洲本においても五月十一日に帰着した大村純安・平瀬伊右衛門・多田禎吾、翌日帰着した阿部興人らが活動を開始していた。こちらでも檄文が作成され、徳島の小野又兵衛らとも連携をとった上で、十三日朝に徳島と呼応して行動を開始することが藩兵隊の中で決定された。十二日の昼頃から農兵が続々と洲本に入り込みはじめたことなどから事態を察知した寺沢甚内ら藩首脳陣は、藩兵隊司令や大村らに対して必死の説得工作を続ける。これが功を奏して、夜明け頃には藩兵たちも一時は拳兵中止に傾きかける。しかし、十三日の朝五時半（午前九時）頃、徳島から帰ってきた藩士が「徳島では予定通り出兵しているぞ」と叫んだことから藩兵達が一気に激発した。

徳島藩兵は、稲田家菩提寺の江国寺



『公文録徳島騷擾始末』より「徳島藩須本暴挙各隊長届書」（部分）洲本での暴発を指揮した藩兵隊司令の陳述書

の僧侶を使者に立てて稲田邦植家族の待避を勧告した上で、洲本近郊の宇山にあった稲田屋敷を砲撃し、これを炎上させた。この他にも稲田家の学問所で淡路における勤王運動の中心となっていた益習館や、分藩運動を主導していた稲田家の重臣三田昇（昂）馬の屋敷などが次々と焼き討ちされた。この攻撃に対して、洲本の稲田家臣団も組織的抵抗は見せていない。この十三日の襲撃は徳島から急遽駆けつけた先山弓弦ら藩首脳陣の説得によって沈静化し、十五日に一部を残して藩兵隊は解散している。

『公文録』によると、この襲撃には銃士三百二十八名、銃卒六百十四名、農兵千四百七十八名、由良・岩屋砲手百十九名が参加し、稲田側では死者十五名、重軽傷者二十一名、他に自殺者二名という犠牲者が出て、稲田屋敷や益



現在の洲本城跡

蜂須賀茂詔と庚午事変

茂詔の影響

幕末期に蜂須賀家の藩主であった蜂須賀斉裕は慶応四年一月六日四十八才で、家老稲田家の当主である稲田植誠は慶応元年七月二十七日に二十二才で亡くなっている。斉裕を嗣いだ茂詔は二十一才、邦植はわずか十一才（明治維新時には十四才）であった。明治維新の直前のこの時期の二つの相続は、藩内に大きな動揺を与えただろう。



(写真1) 蜂須賀茂詔肖像写真

明治二年六月二十四日徳島藩知事となった蜂須賀茂詔は、七月二十六日に帰藩し、職制・軍政・財政にかかる全般的な藩政改革を断行している。その中で九月二日知事名で藩士達に示した通達の内容は非常に厳しいものであった。（写真2）は新居水竹関係文書の中に残された知事の告諭である。戊辰戦争中徳島藩が十分に活躍できなかった事を知事自ら嘆いていることを直接示したのである。この告諭は、徳島藩士の中に大きな疵となって広がり、庚午事変に至る過程の中で、稲田家に対する積極的な武力行使を肯定する流れを作ったと言えるのではないだろうか。



(写真2) 蜂須賀茂詔告諭（徳島文理大学付属図書館蔵新居水竹関係文書）



(写真3) 蜂須賀茂詔告諭写（渡辺家文書）

うか。明治三年四月六日の会議においても、茂詔は藩内の強硬論を完全に押さえざることはできず、十士代表の派遣を容認する。若い茂詔の中にどれだけの危機への認識があったのかはわからない。

岩鼻権知事小室信夫を徳島県大参事として事後処理に当たらせることを決めていく。茂詔は五月二十八日に東京を汽船にて出発し、三十日には洲本へ到着し藩士に向けて告諭している。（写真3）は藩士である渡辺家文書に残された知事通達の写しである。「この度の騒動について、天下では厳しい見方をしている。政府（徳島藩庁）に対しても謀反の嫌疑を持つている。特に藩庁の暴挙に対する処分に実効が上がっているのかを調査するため、太政官より田中（不二麿）中弁と、外に黒田（清綱）弾正少弼が派遣され監督することになった。まことに当藩の存亡はこの処分にかかっている。朝廷の趣意を厚く守り、天下の疑いを解くように。今後知事の職掌が立つようになり取り調べをしていくので神妙に行うように。」と書いていっている。朝廷が徳島藩庁に対しても疑いを持つており、藩役人が暴挙に組み合っていないことを明らかにしなければ、徳島藩の存亡にも関わることであることを示した。茂詔は洲本において取り調べと処置を行い四日には徳島へ田中不二麿とともに入った。六日には黒田清綱も徳島に着き、取り調べを始めている。

徳島藩の処分は八月になって下され、大量の処分者を出した。

その他の処分について「公文録徳島騒擾始末」で見ると、徳島藩領から稲田支配地を引き離すため稲田家は十月十五日正式に北海道移住が言い渡されている。しかし、移住が終了するまでの期間、稲田家の領地を淡路島に集中させて兵庫県

に編入することも同時に決めている。今までの稲田旧領阿波・淡路七郡五十ヶ村を調査した。調査によれば、稲田領は一万四千五百石といながら全ての益を金に直すと六万三千両を超える生産があったことがわかる。これらも換算され、明治四年四月になって、淡路津名郡四十三ヶ村計三万余石が兵庫県に編入された。しかし、同年八月には廃藩置県が行われ、淡路の村々は再び全て徳島に県庁のある名東県に編入されることになった。

また稲田家の北海道移住に関しては、明治四年二月に徳島藩の支配地である新冠郡を稲田家支配地に変えてもらうことを申し入れ、三月十五日に開拓使・太政官の許可を得ている。五月十五日には、稲田邦植に対し維新期の功績により感状が与えられ、さらに従五位の位が与えられている。こうした稲田家への処置は、この事件を治めるために茂詔や徳島藩庁の人々が積極的に動いた結果でもあるだろう。

稲田領の総生産調査

阿波国5郡 27か村		淡路国2郡 23か村	
米	3687石58028	米	5088石07652
麦	2663石78397	麦	844石70621
銀	739貫729393	銀	14貫530471
阿淡両国 50ヶ村			
米	8775石6568	代銀	4464貫615397
麦	3508石49018	代銀	789貫41029
銀			754貫259864
銀計			6008貫285551
代金			63539両1分

国立公文書館「公文録 庚午二四徳島騒擾始末 四」より作成
この調査を元に淡路国津名郡43か村(三万余石)が兵庫県に編入された。

稲田家臣の群像

猪尻派と洲本派

南 薫風くわんぷうの書簡から

庚午事変再検討の課題の一つに、稲田家の洲本上層家臣たちの意識や行動と脇町猪尻派の家臣たちのそれとの違いをどのように見るかという問題がある。美馬郡脇町伴原の藁原家文書はその課題を解き明かし得る数少ない史料である。ここに「猪尻侍」を代表する南薫風の書簡を紹介しながらその問題に迫ってみよう。

「鷲尾殿ヲ始某々ニも示談」し積極的対応の姿勢に出た。南が先川牧之進に宛てた挙兵討幕の可能性について論じた手紙では「於今人望御失之幕府ニ候得共暴策堂上浮浪之術中二而一時幕滅勝算無覚束奉存候（中略）談判之諸侯ニ統御之無諸侯鷲尾殿二者未タ奉調候得共是も数万之人数指揮之御方トハ不奉存」と機



後文

南薫風書簡（藁原家文書）

前文

南薫風は、天保七（一八三六）年伴原に生まれ、その家系は代々稲田家の家臣であった。安政年間に猪尻の同志尾方長栄や工藤剛太郎とともに京都に上り勤王の志士たちと交わり、後に江戸に出て幕末の時局の動向を観察。元治元（一八六四）年禁門の変の後、稲田植誠にすすめて勤王を唱えしめた。慶応年間、京都で新選組に捕まったこともあった。さらに戊辰戦争においては、西ノ宮表に出兵、高松征討に従軍、征東に際しては鷲尾氏の護衛を勤めるなどした。

刻々、戊辰戦争の事態が急迫するなか稲田家に急進的勤王・討幕派として期待されるところは、南薫風が予期したレベルを遥かに越えるものであった。南は「於私共者難心得儀共存候」とその立場を阐明にすることの即答を避けたが、当時同道していた洲本派の内藤弥兵衛は

町か二町之田ニ生ヲ預ケ候様相運可然奉存候」と述べていること。（洲本派は、あくまで士族昇格を主張し嘆願書の提出を重ねた。）

② 稲田氏の給地を猪尻と洲本に二分し、猪尻派の結束こそ肝要であることこの固い意志があったこと。

③ また、二分するにあたり「正邪曲直ヲ正シ、無用人門閥論ヲ取置キ、其御役ニ可立者計リテ御登庸相成候様」と、旧弊門閥を打破し人材登用主義を提唱していること。

④ 藩内の日和見主義に決別し「今日雖有朝命ヲ相蒙り候得者早々力ヲ尽シ奏功ヲ遂御家モ不遠内返上被遊程之御功不相立者満天下之人ニ対シ何ト申分ヲ相立候哉」と旧体制の温存を拒否していること、などなど。

（藁原家文書は先年、火災により焼失した。写真撮影されていた史料の残存によりその一部が解読されているが、今後さらに、その再検討が望まれる。）

（松本 博）

尾方長栄（稲田家臣 猪尻派）
十五才で讃岐国高松の藤川三溪の門に入り、十九才で帰国し岩津の岩雲花香に国学を学ぶ。徳川家茂が上洛した元治元（一八六四）年京都へ行き、諸藩の志士と交わり、有栖川宮熾仁親王と知り合うなど、同郷の志士南薫風・工藤剛太郎らとともに王事に奔走している。王政復古後は、帰京し脇町・猪尻の稲田家臣をまとめる役割を果たしている。



尾方長栄肖像写真



後文

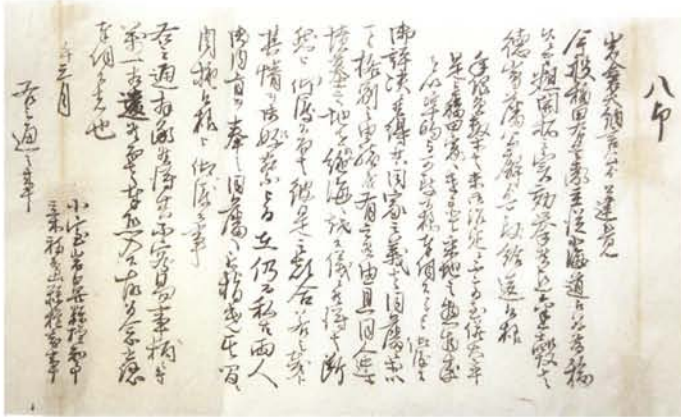
三田昂馬書簡（藁原家文書）

前文

民衆の見た庚午事変

庚午事変の主役は、徳島藩と稲田家の衝突であり、庶民とは遠いところであり、実際には、農兵の動向や農民からの人夫役の徴収などもあり、決して庶民と関係のないところで行われたものではなかった。人々は庚午事変の情報を積極的に集め書き残している。興味深い史料をいくつか紹介する。

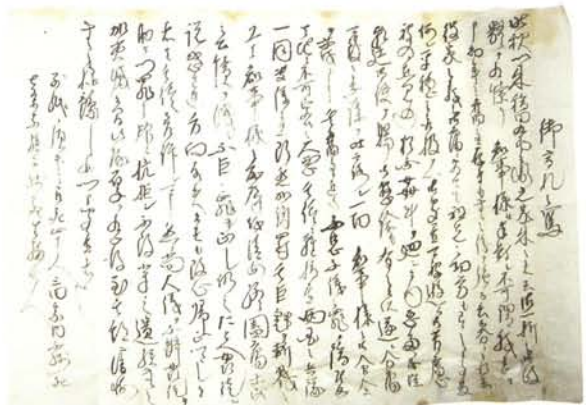
(写真1)は、井上家文書に残されている文書の一部である。この古文書は前が欠けているが明治三(一八七〇)年四月四日、東京への十士派遣を前に



(写真1)「徳島藩稲田家臣申立一件覚書写」(井上家文書)

して、稲田家と徳島藩の動きを藩士達に広く公開した文書の写しである。井上家は、徳島藩の東征に調達方を勤めるなど深く関わったり、新居水竹と深い関係を持つなど政商と言える立場にあり、こうした情報を得ることができたのだろう。

(写真2)は、西端山(現つるぎ町)の庄屋であった谷家に残されていた檄文の写しである。この檄文は実際に騒動が起こったとき、洲本や脇町などの街なかに張り出されたものと同じものである。これは、新居水竹の檄文を元に柴秋邨が一般人にも読めるように書き換えたものとして、明治三年五月と書かれていたという。



(写真2)「御高札之写」(谷家文書)

御高札之写

昨秋以来稲田九郎兵衛元家来之者共御一新之御政ノ體ヲ相悖リ 知事様江奉対シ不可謂我意ヲノ申幼年之旧主存奉も無之儀ヲ強而言募り候得共ノ彼家之義者御藩におおても祖先之功勞も有之候事故ノ何レ平穩之取扱ヲ以御処置可被遊と御苦慮ノ被為在見込猶亦茲計ヲ廻シ候内恐多ク茂從ノ朝廷御使ヲ賜御整(聖カ)論も有之候所遂二分藩ノ可致二素謀ヲ吐露シ一切 知事様之御命令ノヲ蔑ニし其旧主迄も不忠子不儀之罪ニ陥候段ノ天地二不可宥

侮ノ無之様豫しめ以申聞置者也

別紙二須本二召死四十人三田家内不
残死
七条家族不残死 生捕七人

(写真3)は、半田村(現つるぎ町)酒井家文書に残された明治初期の稲田家臣の一覧である。半田村は稲田家の領地であり、稲田方の情報を得ることができたのだろう。稲田家が北海道へ移住したという情報も書かれている。

置兩國之兵隊ノ一同決儀之上断然加誅罰其巨魁ヲ斬戮之ノ上者知事様之恥辱を清め終闔藩士民ノ公憤ヲ洩シ不巨之罪ヲ正し仍之たとへ茲徒ニノ説惑され方向取失候者も改心帰正いたし候ノ者は其假差許シ可申然二尚大儀ヲ不辨姦徒ヲ助ケ門罪之師ニ抗拒シ不改輩之遺類方之ノ加夷減候間此趣厚ク相心得至其期二後



(写真3)「淡路国洲本城代稲田九郎兵衛家臣武鑑諸役人附」(酒井家文書)



八丈島における上田甚五右衛門

上田甚五右衛門友泰（一八二九〜一八九九）は徳島藩士中尾朝榮の次男として生まれ、上田家を相続した。幕末に淡路の津名郡代・三原郡代や農兵大隊長を務め、藩の軍制改革にも参与している。戊辰戦争に際しては、明治元（一八六八）年一月に親衛大隊長として京都警衛にあたり、同年二月には参与大原重朝に随って東下し、江戸城開城後は増上寺に駐屯して江戸の警備に当たった。その後東北地方を転戦し、その功績により奥州鎮撫総督から感状を与えられている。

庚午事変の時には洲本で病床に伏していたが、五月十三日の蹶起に際しては洲本銃卒大隊司令として稲田方攻撃の指揮を執っている。事変後太政官から終身流罪を申し渡された甚五右衛門は、明治三（一八七〇）年十月に今田増之助・織田角右衛門・箕浦八郎右衛門・矢尾田精一・穂積問兵衛・平瀬所兵衛・廣田加左衛門・稲垣軍兵衛・立花清記と共に八丈島に流罪となる。（今田・織田・平瀬・稲垣・立花の五名は途中の大島波浮港で病死）

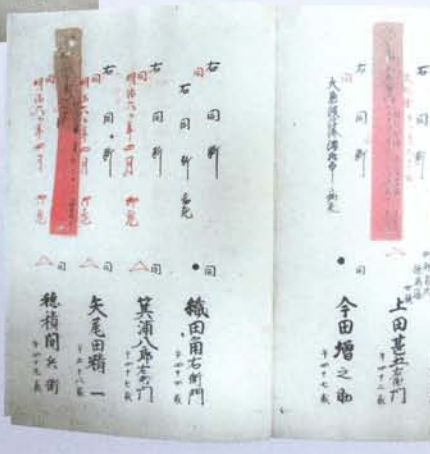
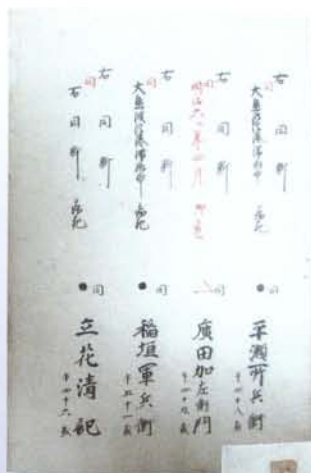
八丈島での上田甚五右衛門らは、流

人仲間で『八丈実記』の作者として知られる近藤重蔵（蝦夷地探検で有名な近藤重蔵の子）と深い親交を結んだ。「軍学ハ和漢両朝ヲ学ヒ西洋法迄モ熟練シ、剣道ヲ得柔術ノ奥旨ヲキワメ又和書ヲモ好ンテ和歌ヲモタシナメトモ、マコトニ謙退辞讓ノ君子、感スルニタヘタリ」というのが近藤重蔵の上田甚五右衛門評である。また、『八丈実記』には、「つみとかの 積もりて重き 流れ木の 憂きか中にも うくいすの はつ音に春を まちしりて 待間程なく 山さくら さそふあらしに またき散る」で始まる長歌と「雪霜のふる世なからになき人もつみ消る名をうるよしもがな」「罪ふかきこのミの程も流れ木のはな咲御代の春に逢はや」という反歌からなる上田甚五右衛門の『草庵の記事』や、箕浦八郎右衛門の小文集『八丈の夢の行衛』、穂積問兵衛が赦免に際して詠んだ「早運ノ開キ始メヤ桃ノ花」『捨ラレテ又世ニ出ルウチワ哉』の句などが多数収録されている。

庚午事変で流刑となっていた人々は、新律綱領発布にともない明治六

（一八七三）年四月に罪を減ぜられて島を離れる。『八丈実記』には、島を離れた直後の甚五右衛門が近藤重蔵に宛てて庚午事変の顛末を記した書簡が収められている。そこには「御尋ニヨリ認候此書付他見無用ニ願上候」と断った上で、「（稲田家は）剽出王事ニ勤勞アリケルガ往々其功ニホコリ、其臣等終ニハ幼若之主ヲシテ尚其古主家（蜂須賀家）ノ恩義ヲ忘レシメ、返テ一藩ヲ建シ事ヲハカリ、御一新ノ折カラスコブル我意ヲ建テ（中略）藩士一

同傍觀スルニ不忍ノ次第二オヨビ、我等干戈ヲ動シタルニテ」と、稲田家臣団の分藩独立運動に対する不満が蹶起の理由として挙げられている。また、「右干戈動シ候儀モ旧主家（蜂須賀茂韶）東京へ罷出候留主ニ相発シ、越度ニ相成不申様ニ相企候、知事（茂韶）一切不知処ヨリ出候ナリ」とあり、あくまでも旧主蜂須賀茂韶には責任が無いことを強調している。この書簡には、庚午事変における徳島本藩側の中心人物たちの思いが代弁されている。



之書衛果徳
五公右結な
都甚五のな
（東田事な
細蔵）上庚午
「流八丈島
内所蔵）門ら
五館所蔵）八
内所蔵）島
五館所蔵）島

庚午事変の群像

庚午事変関係文献資料目録			
文献名	著者	発行年	備考(発行者・所蔵者)
1 古文書			
新居水竹関係文書 阿部家文書 小倉家文書 藤原家文書 若倉具視公文書 三条実美公文書 木戸孝允公文書 大久保利通公文書			徳島文理大学附属図書館所蔵 北海道立図書館所蔵 個人蔵 (原文書は火事にて失われた。写真は松本博士所蔵) 国立国会図書館憲政資料室、国立公文書館等所蔵 国立国会図書館憲政資料室等所蔵 国立国会図書館憲政資料室等所蔵
2 記録			
徳島藩紛擾始末 福田九郎兵衛北海道移住仰付ラレ御沙汰書写 徳島藩擾始末 一、二、三、四 徳島藩士族暴動二付其党与及知事以下処分暴動始末 蜂須賀家記 庚午事変心覚 上下	太政官 太政官 太政官 太政官 岡田鶴里 根本熊次郎他	明治3年 明治3年 明治3年 明治3年 明治9年 明治36年	太政官日誌第33-34-35号 太政官日誌第44-45号 公文録 太政類典 1編199巻治罪、養理9
3 刊本			
竹憲遺稿(大村純安遺稿集) 勤王烈士伝 福田楯蔵 明治庚午徳島藩擾始末(講演速記) 明暦 近藤康平伝 庚午事変研究の契 庚午事変の公文書 庚午事変心覚 淡路方面より見たる福田騒動 庚午証遺草 庚午事変福田騒動六十年前の夢明治新政の犠牲 徳島藩庚午事変説 庚午事変に就いて 徳島藩紛擾始末 福田九郎兵衛北海道移住仰付ラレ御沙汰書写 福田家昔物語 明治三年庚午騒擾関係文書第一輯 庚午阿淡志士之事跡 和訳蜂須賀家記 淡路に庚午志士の遺跡を訪ねて 福田騒動概説 庚午事変とその前後 新居水竹獄中の手紙 庚午事変の再検討 伊豆七島へ流刑になった二十七の庚午志士はどうなったか 十八才で切腹した滝直太郎のことも 強かった武士の責任感-滝直太郎の実父について- 大赦の恩命に浴し青天白日となる 近世淡路の字問と勤王 益習館の焼失と事変直後の洲本 庚午事変年表 庚午事変関係者の墓碑 庚午事変関係者の墓所 赤と白 庚午事変の面影 庚午事変 事変後百年たつての私の願い 庚午事変の政治的意味 転換期の犠牲者たち 庚午事変(福田騒動)-明治新政の犠牲 猪尻に於ける福田家中 庚午事変を報じた柴嶺都白筆の書簡 徳島藩紛擾始末 三田島馬の提出した福田の勤功報告書 水竹の瓦礫表解説 庚午事変関係者のその後 八丈島の流人生活 平瀬伊右衛門をめぐる三兄弟 新居水竹の子 小室信夫伝抄 楸村門下の三後傑 禁錮三年処刑後の赤川直弥 庚午事変と静内 北海道静内における福田家臣 福田藩移住開拓記念碑について 明治の切腹 明治庚午事変雑感 庚午事変文庫目録 明治維新と阿淡の軌跡 あわじ第八号 本会創立三〇周年 庚午事変一三〇周年記念号 庚午事変関係新居水竹等遺稿要解	鹿島秀磨 萩原正太郎 新居敦治郎 末広一雄 一宮松次福 井上羽城 井上羽城 福田靖安略記 長尾覚 原謙吾 羊我生(飯田義資) 太政官日誌 平野義賢 村田丑太郎 著者未詳 岡田鶴里・山田貢村 平瀬欣三 阿波郷土会庚午事変研究会 阿波郷土会 金澤治 平瀬金造 滝 政男 岡田茂一 安富 晋 菊川兼夫 新見貫次 金澤治 山本武男 佃 清風 平瀬金造 庚午事変編集委員会 蜂須賀年子 貴司山治 船山 馨 猪井達雄 津田史史 岩村武勇 岩村武勇 後藤謙一 岡田亀太郎 新見貫次 伊川公司 平瀬金造 金澤 治 金澤 治 平瀬金造 赤川笑子 秋永 芳郎 吉田一郎 浅川義一 中康弘通 藤岡道也 藤丸昭 松本 博 淡路地方史研究会 竹治貞夫編	明治20年 明治39年 大正3年 大正15年 昭和10年 明治36年 明治36年 明治36年 大正8年 昭和4年 明治4年 昭和13年 明治36年 昭和13年 昭和17年 昭和17年 昭和18年 昭和19年 昭和34年 昭和36年 昭和36-52年 昭和45年 明治27-28-36年 明治30年 大正12年 昭和7年 昭和10-11年 昭和32年 昭和33-34年 昭和35年 昭和35年 昭和36年 昭和37年 昭和42年 昭和45年 昭和58年	徳島県立図書館 呉郷文庫 勤王烈士功績建碑事務所 維新史料編集会・続日本史稿協会叢書 近藤家 阿波郷土会 徳島毎日新聞掲載 徳島毎日新聞掲載 福田会 村田丑太郎 平瀬金造 阿波郷土会 平瀬金造 阿波郷土会 阿波郷土会 徳島市中央公民館
4 研究			
明治三年五月徳島藩擾に関する事実 荒城君国事に尽力せられし事実 蜂須賀藩福田騒動の真相 水竹新居先生の介錯直話 庚午事変に就いて 三田島馬に関する資料 明治庚午淡路洲本の動揺 庚午事変と思想的背景 福田九郎兵衛様御分限帖 福田騒動と讃岐越境 蜂須賀藩における庚午事変福田騒動とその諸環境 淡路城代の成立をめぐる 共同研究 明治維新 第3章 維新の傍流 日本史の中の庚午事変 明治三年徳島藩擾裁判関係資料	小杉温郷 荒木重雄 西村史郎 後藤謙一 飯田義資 佃 実夫 後藤謙一 金澤 治 後藤謙一 藤岡道也 松本 博 松本 博 佃 実夫 金澤 治 中山 勝	明治27-28-36年 明治30年 大正12年 昭和7年 昭和10-11年 昭和32年 昭和33-34年 昭和35年 昭和35年 昭和36年 昭和37年 昭和42年 昭和45年 昭和58年	【史談速記録】第17-27-30-36-56輯 【史談速記録】第56輯 中央史壇 第7巻第1号 阿波郷土誌 第3輯 阿波郷土第1巻第3号、第2巻第4号 徳島近代史研究第3号 兵庫史学17-19-20号 阿波郷土会報24号 兵庫史学23号 阿波郷土会報27号 日本歴史175号 史泉34号 阿波郷土会報63-64号 季刊淡路の文化第5巻1号
5 新聞記事			
庚午事変の公文書 庚午事変心覚 庚午事変福田騒動六十年前の夢-明治新政の犠牲	徳島毎日新聞 徳島毎日新聞 徳島毎日新聞	明治36年 明治36年 明治44年	
6 参考図書			
徳島県史 第5巻 お登勢 福田家御家中筋目書 第一、二、三、四巻 静内町史 徳島近代史Ⅰ 幕末維新編 徳島近代史Ⅱ 明治の徳島 兵庫県史 第5巻 因説徳島の歴史 脇町史 下巻	徳島県 船山 馨 猪井達雄 静内町 徳島新聞社編 徳島新聞社編 兵庫県史 三好昭一郎・高橋啓編 脇町	昭和41年 昭和44年 昭和47年 昭和50年 昭和50年 昭和51年 昭和55年 平成3年 平成17年	毎日新聞社 徳島新聞社 徳島新聞社 河出書房出版社

※この文献目録は、藤丸昭「庚午事変文庫目録」「庚午事変」(昭和45年 徳島市中央図書館)、菊川兼夫「庚午事変文庫目録」「淡路第8号」(平成3年 淡路地方史研究会)等を参考に作成しました。またこの目録は、これらの文献を参考に作成しました。

庚午事変関係年表

西暦	和暦	月	日	内 容	
1865	慶応 1	7	19	稲田植誠没、邦植稲田家を嗣ぐ(11才)。	
1867	慶応 3	10	14	慶喜、大政奉還を願い出、翌日許可される。	
1868	慶応 4 (明治 1)	1	3	鳥羽伏見の戦い(戊辰戦争はじまる)。	
		1	6	藩主斉裕没、1・17茂昭第14代藩主となる(21才)。蜂須賀を称す。	
		2		稲田邦植一大隊を率いて有栖川宮総督に従い東下する。上田友泰(碁五右衛門)ら官軍として参戦。	
1869	明治 2	6	17	版籍奉還許される。6・24徳島藩となる。茂昭、知藩事となる。	
			25	太政官、禄制改革を通達。家禄十分の一となる。藩士を士族と改める。士族・卒族の称を定める。	
		7	26	茂昭、徳島へ帰藩する。	
		8	10	稲田家来より稲田家へ従来通り家来としての身居を嘆願する。	
		9	2	茂昭、徳島藩士綱紀肅正の告諭を発す。	
			24	稲田家臣団徳島藩知事へ陳情する。この後、稲田家の嘆願・陳情が続く。	
		10		徳島藩、外交方として、南堅夫・阿部興人・益田永武の3人を任命する。	
		11	13	徳島藩、大参事井上高格を東京に派遣し、事態の收拾を図る。太政官より士族・卒族の別は知事先決すべしとの指示あり。	
		12	28	朝廷へ稲田家臣より直接嘆願する。	
1870	明治 3	1	2	稲田家臣、有栖川宮らへ懇願を始める。	
		2	11	稲田家臣洲本稲基神社で誓約集会する。	
			18	徳島藩外交方3人南堅夫・阿部興人・益田永武の3人長州藩脱隊騒動の視察に行く。	
			21	岩倉公より派遣の二勅使(小室信夫・立木兼善)徳島に到着する。稲田主従の北海道に移住を指令する。	
		3	10	徳島藩外交方の阿部興人・益田永武東京へ帰る。南堅夫は帰藩する。	
		4	1	稲田家臣、北海道移住を受け入れの代わりに稲田藩を独立させてほしいとの回答を出す。	
			2	蜂須賀知事、意見書を作成。(北海道移住中止、稲田氏への特別賞典の下付)	
			4	知事、藩内の混乱を考え一件書類(13通)を徳島城鶴の間で公開。徳島藩兵隊より来藩中の勅使に陳情書提出する。	
			5	除姦論で藩士憤激し、稲田討伐の決議連名書を知事に提出する。洲本兵隊中よりも来藩中の勅使に稲田弾劾書を提出する。	
			6	鶴の間会議、銃士二番隊長より声明書。知事より藩士に暴挙なきよう告諭あり。	
			7	藩士より太政官へ弾劾書提出を決議し、藩士総代10名を選出し、監督者として新居水竹・小倉富三郎を陳情に上京させる。	
				尾関・星合両権大参事も同行。小室・立木勅使2人も帰京。	
			20	総代一同東京一橋藩邸にて集合する。	
			21	徳島藩士代表、太政官へ哀訴状を提出する。	
			23	勅使2人帰京し朝廷に復命する。	
			27	太政官、知事及び稲田邦植を東京へ召還する。	
		5	6	平瀬伊右衛門ほか7人東京藩邸を脱走(脱走帰藩)する。	
			9	水竹・富三郎ら太政官へ八土脱走の旨届出する。	
			10	太政官より暴挙取り押さえ方発令される。尾関・星合両権大参事急ぎ帰藩。	
			11	脱藩者、洲本へ着く。	
			12	知事、稲田邦植乗船上京する。脱藩者徳島着、檄文発表する。	
			13	徳島の同志美馬猪尻へ出発。下条勅兵衛・牛田九郎兵衛、下浦願成寺で割腹。猪尻稲田家臣士分167、卒175高松藩領へ避難する。	
				夜、尾関・星合権参事帰藩し太政官の内命(暴挙あらば徳島藩取潰)を伝達する。	
				洲本襲撃、自殺2・即死15・深手6・浅手15・焼失家屋多数。	
			14	猪尻へ向かった兵、正午に解散。大阪兵学寮生徒、大阪稲田邸襲撃。知事一行東京着。	
			15	大村純安ら洲本騒擾の藩士、藩に恭順し拘禁される。	
			21	国元の騒擾の報、東京に達する。知事、直ちに太政官へ報告する。	
			23	太政官、弾正小弼黒田清綱と中弁田中不二磨を派遣し監督処分をすること、さらに岩鼻県権知事小室信夫を徳島県大参事として事後処理に当たらせることを決める。	
			28	知事、藩内鎮定のため東京を発つ。	
			30	知事、洲本着。	
		6	1	知事、洲本にて藩士に太政官への恭順について告諭を発す。	
			4	知事、徳島着。	
			9	讃岐へ避難中の稲田家臣引き上げ帰国する。	
		7	2	新居・小倉取り調べをうける。 稲田邦植洲本へ引き上げる。	
			8	騒擾志士判決発表(斬罪10人、流罪終身26人、流罪7年1人、禁固終身8人、禁固3年33人、禁固2年半5人、謹慎44人)	
			9	3	助任万福寺で切腹4人、住吉島蓮花寺で切腹4人。
			11	流罪者、徳島を発つ。	
			15	東京芝白金藩邸で新居・小倉切腹する。	
			25	流罪者、東京着。	
		10	3	蜂須賀茂昭、太政官より謹慎が下命。	
			9	稲田家へ金5000兩下賜される。	
			15	八丈島への流罪者東京を発つ。稲田家に北海道移住・兵庫県眷属への管轄替え下命される。	
		11	3	新島配流者東京を発つ。16日着。	
			5	蜂須賀茂昭の謹慎が解かれる。	
1871	明治 4	2		北海道日高国静内郡へ第一次移住(147戸、550余人)	
			3	15	徳島藩、北海道日高国新冠郡の稲田家編入を申上。
			4	15	北海道日高国新冠郡の稲田家編入が許可される。
			4		淡路国津名郡43か村、兵庫県に編入される。
			5	15	稲田邦植に対して維新期の功績についての感状および従五位が与えられる。
			8	25	稲田家臣第2次移住、234人紀州沖にて平運丸遭難、溺死者83人。
1873	明治 6			新律綱領により流罪者赦免。	
1889	明治22			大赦令により全員赦免。	

参考文献:金沢 治「庚午事変史年表」、松本 博「徳島の100年 年表」他

展示品目録

No.	標 題	年 代	備 考
小倉富三郎			
1	小倉富三郎画像		小倉家文書
2	小倉富三郎書(辞世)	明治3年9月15日	小倉家文書
3	小倉富三郎書(辞世)	明治3年9月15日	小倉家文書
4	小倉富三郎書(辞世)	明治3年9月15日	小倉家文書
5	除姦ノ説大意	明治3年5月	新居水竹関係文書
新居水竹			
6	新居水竹日記 庚午	明治3年	新居水竹関係文書
7	ふくたう日記	明治3年	新居水竹関係文書
8	申立書	明治3年4月	新居水竹関係文書
9	上書	(明治3年)	新居水竹関係文書
10	新居水竹書簡(たか・敦次郎宛)	(明治3年)4月28日	新居水竹関係文書
11	新居水竹書簡(敦次郎宛)	(明治3年)5月7日	新居水竹関係文書
12	新居水竹書簡(敦次郎宛)	(明治3年)5月15日	新居水竹関係文書
13	新居水竹書簡(高・敦次郎宛)	(明治3年)5月16日	新居水竹関係文書
庶民の見た庚午事変			
14	肩を並へ度と申(福田九郎兵衛主従北海道移住評決に対する申立草稿写・前欠)	午3月(明治3年)	イノウ08524
15	御高札之写(庚午事変における徳島藩側の檄文)	(明治3年)	タニケ00424
16	淡路国須本城代福田九郎兵衛家臣武鑑諸役人附(写)	明治3年11月	サカイ00281
17	時勢見聞録	明治21年	タケタ00008
蜂須賀茂韶			
18	知事告諭(直書)	(明治2年)9月2日	新居水竹関係文書
19	知事告諭(写)	(明治3年)6月1日	ワタナ00037
20	先君誠堂公與林厚徳尺牘	(明治初年)	ハチス00124
21	藩知事誠堂公與林小弁書	明治3年	ハチス00125
22	藩知事誠堂公與林小弁書	明治3年10月9日	ハチス00126
23	御達写(徳島藩知事蜂須賀茂韶、謹慎赦免の件)	(明治3年)11月5日	イノウ00703
大村純安と阿部興人			
24	竹窓遺稿	明治20年	中瀬家文書
25	阿部興人日記(備忘録)	明治3年	北海道立図書館所蔵阿部家文書
26	阿部宇之八伝		徳島県立文書館所蔵
八丈島流罪			
27	流人明細誌 五冊の内五	文久1年~明治4年	東京都公文書館所蔵
稲田家臣の資料と洲本城下絵図			
28	奉祝尾形樞翠君凱陣序(尾形長栄、戊辰戦争凱旋奉祝文)	明治1年12月	イシカ00001
29	阿波淡路両国絵図		ハチエ00007
30	須本御城下町屋敷絵図		ハチエ00018
庚午事変の文献			
31	庚午志士の面影	昭和36年6月	
32	庚午事変	昭和45年10月	
33	明治維新と阿波の軌跡	昭和52年10月	
34	庚午事変関係 新居水竹等遺稿要解	平成4年5月	

※資料保護のため展示品を変更することがあります。

特別企画展

庚午事変の群像

平成十九年一月二十三日発行

編集・発行
徳島県立文書館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山
電話 〇八八(六六八)三七〇〇

印刷
ナカガワ・アト(株)

〒779-2623 徳島美馬市脇町全務院字岩南三上
電話 〇八八三(五二)一六四三